

日本におけるガス灯文化

日大生産工(研究生) ○伏見 章宏・日大生産工 山家 哲雄

1. はじめ

日本では、昨今のレトロブームや観光資産としての有用性、さらに、その灯る光の質(温かみのある優しい“あかり”)の魅力から、ガス灯が俄かに脚光を浴びている。

本稿では、日本におけるガス灯文化およびガス灯の利用動向に関する学術調査結果について報告する。

2. ガス灯

ガス灯(Gaslight)とは、ガスを燃焼させた時の炎を“あかり”として利用する灯火装置(照明器具)のことである。古くは、室内の照明器具としても使われたが、燃焼煙臭、火災の危険性、換気の問題などから、現在は街路灯として屋外における使用が主流である。

照明用のガス灯の先駆者として名高いのは、英国人の技術者・発明家であるウィリアム・マードック(William Murdoch、1754～1839年)で、1792年に、マンチェスターの自宅において裸火のガス灯を灯した。(図1a 参照)

1812年に、英国人のフレデリック・ウィンザー(F.A.Winsor、1763-1830年)らの努力により世界最初のガス会社が、英国・ロンドンに設立され、さらに、欧米各地でガス会社が設立され、照明としてガス灯が普及して行った。(図1b 参照) その後、ガスマントルを利用した白熱ガス灯に発展し、19世紀半ばまで、欧米の主要都市において、ガス灯の“あかり”が、街路を明るく照らした。

しかし、白熱電球(電灯)の実用化と配電システムの普及により、ガス灯は、徐々に廃れて行く運命を刻む。

現在、ガス灯は、都市景観や店舗エクステリアのアイテムとして用いられたり、レトロブームにより復刻されたり、さらにはモニュメンタルな照明器具として、今もその温かみのある優しい“あかり”を、全世界で灯し続けている。



a ウィリアム・マードック



b フレデリック・ウィンザー

図1 ガス灯の普及の貢献者



図2 東京名所図会 銀座通り煉瓦造り

On the Gaslight Culture in Japan

Akihiro FUSHIMI and Tetsuo YAMAYA

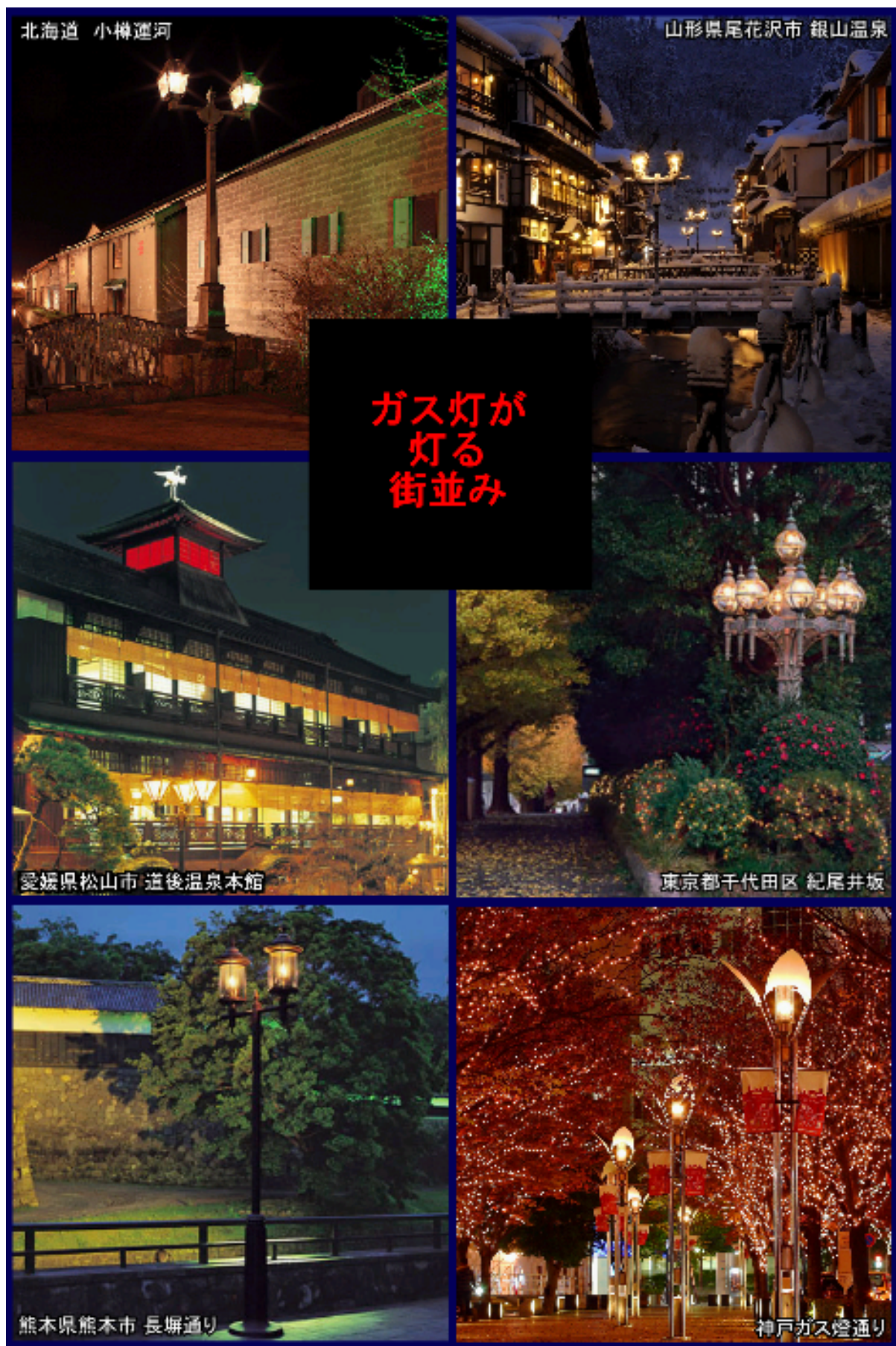


図3 ガス灯が灯る街並み

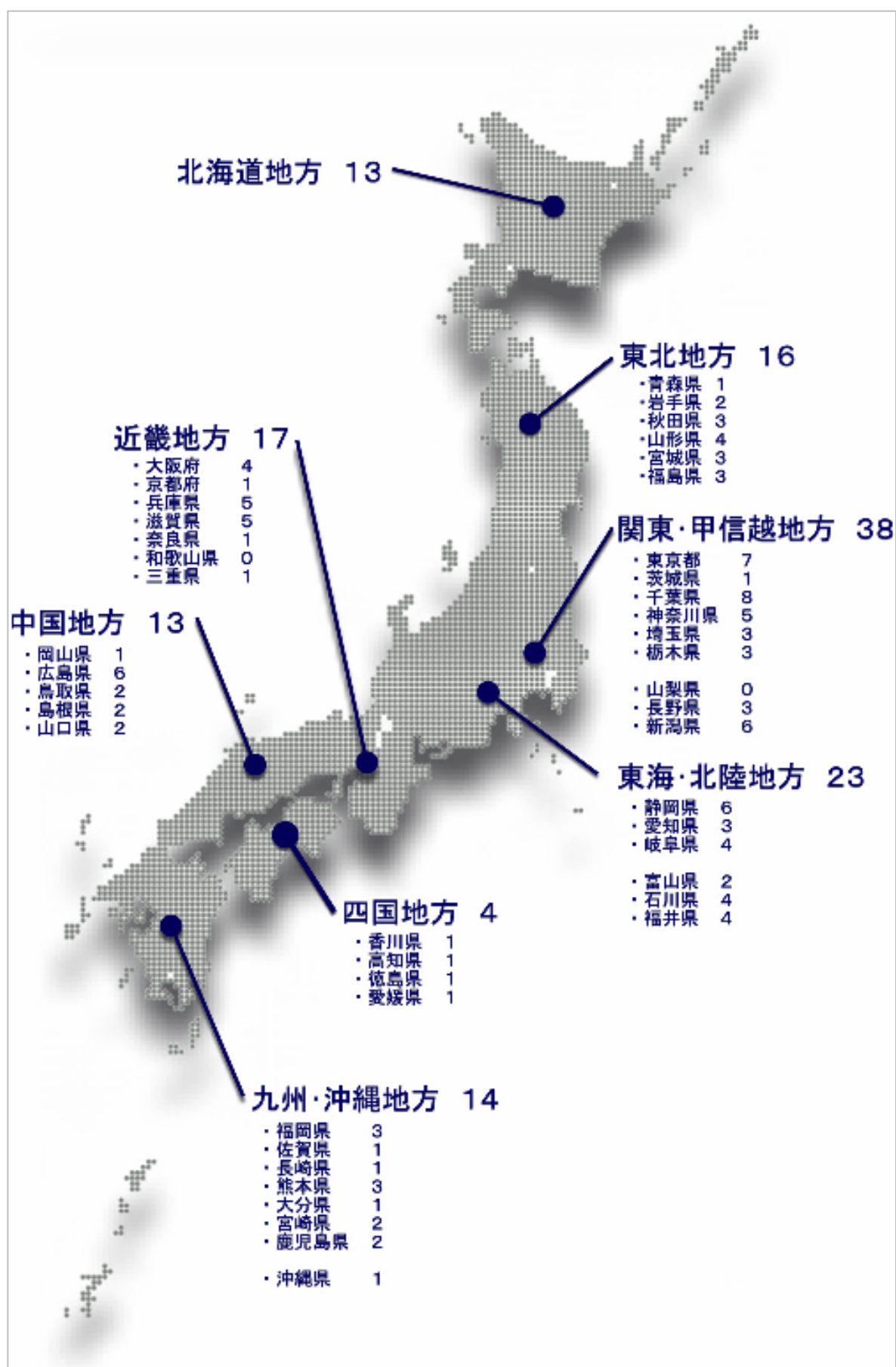


図4 日本の全国ガス灯マップ

3. 日本のガス灯文化

日本では、1854(安政元)年に「日米和親条約」が締結されてから、横浜にはさまざまな西洋の技術・文化が流入した。

日本では、明治初年の「文明開化」による諸外国との自由な交流を期に、西洋から一気にいろいろな文化が伝わり、日本の社会の仕組みが大きく変わった。

1872年(明治5年)、横浜で日本のガス事業が、フランス人アンリ・プレグラン(Henri-Auguste Pélégrian, 1841~1882年)の指導の下、高島 嘉右衛門によって始まり、横浜の外人居留地内(現在の神奈川県庁から「馬車道」付近)に、十数基のガス灯が設置され、温かみのある優しい“あかり”が灯った。これが日本における実用的な最初のガス灯であり、ここを起点にして全国に広がっていった。

その後、1874年(明治7年)には、東京の「銀座通り」にも、街灯として85基のガス灯が灯り、ガス灯は次第にその数を増やしていった。(図2参照)

4. ガス灯が灯る街並み

日本のガス灯は、大正時代をピークに電灯に置き換わって行ったが、昨今のレトロブームに併せて、あるいは、技術革新に伴って、全国規模で多くのガス灯が復刻されている。

都市の雑踏・喧騒の中で夕暮れ時に灯されるガス灯は、その温かみのあるガス特有の柔らかな“あかり”が、我々の疲れた心を癒すと同時に心温まる街の景観をロマンチックに演出し、道行く人に郷愁を誘っている。

図3に、ガス灯が灯る街並みを、図4に、現役のガス灯が灯る「日本の全国ガス灯マップ」を、それぞれ示す。

5. 昨今のガス灯ブームの要因

著者らの調査の結果によれば、日本のガス灯は、以下の目的によって使用されていることが分かった。

- (1) 都市景観のアイテム
- (2) 店舗エクステリアのアイテム
- (3) レトロブームによる復刻
- (4) 歴史的モニュメント
- (5) 街路照明

これらは、観光客を集めるのに役立つ、景色・風物・史跡などと同様に、都市の「観光資源」としての要素も持ち合わせているものと考えられる。

6. まとめ

以上の様に、日本におけるガス灯文化およびガス灯の利用動向に関する学術調査結果について報告した。

本調査研究の結果、日本各地の各都市では、

- (1) 街の中に点在する数多くの歴史・文化的資産を観光資源として活用
- (2) その都市、その街固有のアイデンティティを体感できる観光魅力の創出
- (3) 街並みの活性化対策
- (4) 観光客らの回遊性向上

等々の目的のため、ガス灯を有効活用している現状が分かった。

「21世紀の光」と称される、LED(Light Emitting Diode: 発光ダイオード)照明による白く、高輝度な光と比べ、ガス灯のやさらかな“あかり”は、色温度が低く温かみを感じる光色、薄暗く、仄かに揺らぎ郷愁を誘う“あかり”、それらはじっと見つめることができると共に、街の風景に独特のノスタルジックな雰囲気醸し出し、どこか懐かしい気分になり、やがて心が安らぐものと著者らは思う。

謝辞

本調査研究は、生産工学部の「研究生制度」および創生デザイン学科によってサポートされたことを付記し、感謝の意を表します。

最後に、本調査研究の遂行に際し、日々、温かく心の支えとなってくれました両親に感謝の意を表します。

「参考文献」

- 1) Akihiro FUSHIMI and Tetsuo YAMAYA : "One Consideration about the Gas Lighting", Proceedings of the 7th Lighting Conference of China, Japan and Korea, PT-53 (2014)
- 2) 宮原諄二: 「“白い光”のイノベーション ガス灯・電球・蛍光灯・発光ダイオード」、朝日新聞社、pp.35~116 (2005)
- 3) The official home page of The Japan Gas Association
- 4) The official home page of Gas Museum (Tokyo Gas Co., Ltd.)